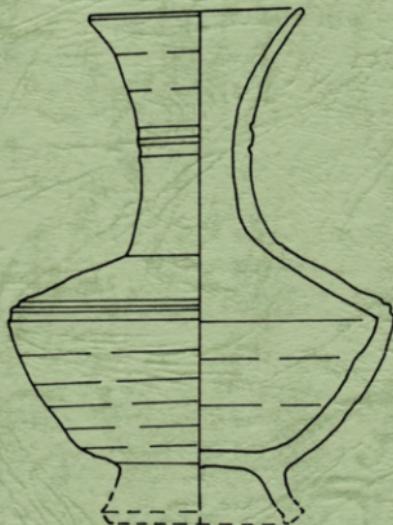


忍ヶ丘マンション建設に伴う

# 忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要

—四條畷市岡山東所在—



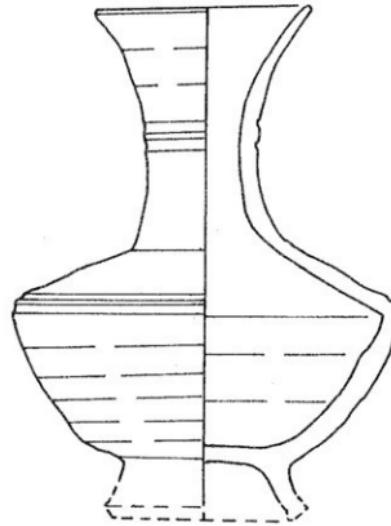
1997年3月

四條畷市教育委員会

忍ヶ丘マンション建設に伴う

# 忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要

—四條畷市岡山東所在—



1997年3月

四條畷市教育委員会

## はしがき

本市の北部に位置するこの地の周辺は、忍岡古墳をはじめ多くの遺跡が存在するところである。中でも忍ヶ丘駅近辺は旧石器・縄文・古墳時代はもとより中世の遺物・遺構までもが数多く出土している。最近も本調査地に隣接する坪井遺跡で中世の鍛冶工房の跡が発見されたばかりである。

今回の調査地は165m<sup>2</sup>程の面積であるが、前に国鉄片町線の複線化工事に伴う発掘調査で発見された古墳時代から中世に至る集落・古墳の複合遺跡に接する場所であり、事前の試掘調査においても遺物包含層を確認したので本調査が実施されたものである。結果は本文の通りであるが、この地に於いても先人のいろいろな営みや暮らしが判明し、忍ヶ丘駅前遺跡の全容解明に貴重な一助となったことは確実である。

概して広大でもない本市の市域であるが、その各所から実に多くの遺物が出土している。その状況を聞くたびに本市の持つ歴史の深さに改めて思いを深くするものである。地勢や気候など自然の所作とはいえ、それを巧みに活用して自らの生活を切り開き、豊かな文化を育て継承してくれた往時の人々の智恵と力が思はれるのである。そしてその延長線上に今日の我々の生活や文化が存在することに私は大きな感激をおぼえるものである。文化財を守り生かすことを郷土愛に結び、市に存する歴史に誇りを感じ、文化豊かな町へと発展することができれば幸いである。

最後に今回の調査にあたって全面的に御協力いただいた柴田安夫氏に深甚なる謝意を表し、本調査報告のはしがきとしたい。

平成9年3月

四條畷市教育委員会

教育長木田喜重

## 例　　言

- 1 本書は、平成7年度の忍ヶ丘マンション新築工事に伴う発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は、柴田安夫氏より委託を受け、四條畷市教育委員会が実施した。  
調査期間等は本文中に記載している。
- 3 発掘調査は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館技師 村上始を担当者とし、調査補助員として岡田恵子があたった。調査の事務等については歴史民俗資料館職員の協力を得た。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、柴田安夫氏・書崖建築設計事務所 黒田主悦氏・株式会社 加賀田組・株式会社島田組・アジア航測株式会社に御協力をいただいた。厚く感謝の意を表したい。
- 5 本書の作成にあたっては、大阪府教育委員会 佐久間貴士氏より御教示を賜った。記して感謝の意を表する。
- 6 出土遺物の整理・実測などについては、村上始・佐野喜美・萬谷満子・田中美鈴・佐野三佐子・橋本真紀があたった。
- 7 本書の執筆は村上始が行なった。
- 8 調査において出土した遺物および写真・実測図面は、四條畷市立歴史民俗資料館に保管している。

## 凡　　例

- 1 本書中のレベルは、T. P.（東京湾平均海面）を用いている。
- 2 本書中の座標の記載は、kmを単位とする。
- 3 方位は国土平面直角座標第VI系の座標北を示す。
- 3 土色および土器の色調は、1994年度版「新版 標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

# 本文目次

## はしがき

## 例 言

第 1 章	遺跡の位置と歴史的環境	1
第 2 章	調査に至る経過	4
第 3 章	調査の成果	
第 1 節	基本層序	6
第 2 節	遺構	6
第 1 遺構面		6
第 2 遺構面		8
第 3 節	出土遺物	10
溝		10
大溝		10
包含層		11
第 4 章	まとめ	15
遺物観察表		16

## 挿図目次

第1図 忍ヶ丘駅前遺跡周辺の遺跡	3
第2図 調査区位置図	5
第3図 土層断面図	7
第4図 第1遺構面平面図	9
第5図 第2遺構面平面図	9
第6図 大溝出土遺物 1	12
第7図 大溝出土遺物 2	13
第8図 大溝・溝・包含層出土遺物	14

## 図版目次

図版1 1 遺跡周辺空中写真（南から） 2 調査前全景（南から）	
図版2 1 調査スナップ 2 第1遺構面検出全景（北側地区、南西から）	
図版3 1 第1遺構面全景（北側地区、西から） 2 五輪塔台座出土状況	
図版4 1 第2遺構面検出全景（北側地区、東から） 2 第2遺構面全景（北側地区、北から）	
図版5 1 第2遺構面検出全景（南側地区、東から） 2 第2遺構面全景（南側地区、北から）	
図版6 大溝出土遺物 1	
図版7 大溝出土遺物 2	
図版8 大溝出土遺物 3	
図版9 大溝・溝・包含層出土遺物	

# 忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要

## 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

忍ヶ丘駅前遺跡は、四條畷市岡山東1丁目・2丁目・3丁目、岡山2丁目・3丁目・4丁目に所在し、JR学研都市線忍ヶ丘駅をほぼ中心に東西約330m・南北約320mの範囲に広がる古墳時代から中世に至る集落跡・古墳の複合遺跡である。

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、東は奈良県生駒市に、西は大阪府寝屋川市に、南は大東市に、北は寝屋川市・交野市に隣接している。地勢の東半分は花崗岩質による生駒山脈の一部で、その西側に大阪層群からなる丘陵と扇状地性の段丘および扇状地が南北に細長く広がっており、さらに西側は山地から西流する河川によって形成された沖積平野が広がっている。

このうち当遺跡は、生駒山地から西流する讚良川と岡部川に挟まれた扇状地性の段丘のほぼ中央に立地している。付近の標高はT.P.+22~25m前後である。

以下四條畷市内および市周辺の遺跡について時代をおって概観を述べる。

旧石器時代では、削器・彫器・ナイフ型石器・細石器・礫器などが出土した讚良川川床遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡があり、周辺においては近畿で旧石器時代の遺跡が初めて発見された交野市の神宮寺遺跡・ナイフ型石器・石核などが出土した布懸遺跡、寝屋川市淀川河床遺跡・高宮遺跡、有舌尖頭器が出土した大東市の宮谷古墳群・北条遺跡などが知られている。

縄文時代では、草創期の有舌尖頭器が出土した南山下遺跡・四條畷小学校内遺跡・木間池北方遺跡、早期の押型文土器が出土した田原遺跡、交野市の神宮寺遺跡がある。中期では船元式土器が出土した南山下遺跡・砂遺跡、交野市の東倉治遺跡・星田旭遺跡、大東市の中垣内遺跡・鍋田川遺跡、寝屋川市の讚良川遺跡がある。特に讚良川遺跡では、大量の土器とともにセタシジミ・カキ・クリなどを貯蔵した土坑を検出しており注目されている。後期・晩期では高坏形土器・注口形土器・土製勾玉などが出土した更良岡山遺跡・深鉢形土器や石器の出土した岡山南遺跡・清滝古墳群・四條畷小学校内遺跡、大東市の城ヶ谷遺跡などが知られている。

弥生時代では前期初頭の大壺が出土した雁屋遺跡、前期中段階の甕や壺が出土した四條畷小学校内遺跡、前期末の壺が出土した田原遺跡、大東市の北新町遺跡・中垣内遺跡・北条西遺跡、寝屋川市の高宮八丁遺跡がある。中期では雁屋遺跡において方形周溝墓や竪穴住居跡を検出し、大量の土器・石器と共に木製四脚容器・鳥形木製品・分銅形土製品などが出土している。特に竪穴住居跡の一軒は火災を受けたもので、炭化した建築部材も出土している。出土状況から当時の住居の規模を知る上で注目されるものである。周辺では、寝屋川市の太秦遺跡、大東市の国見高地性遺跡・中垣内遺跡・西諸福遺跡がある。後期では雁屋遺跡や大東市の北新町遺跡など周辺地域において多くの遺跡が知られている。

古墳時代では、前期の数多くの副葬品が出土した長さ約6.3m・幅約1mの竪穴式石室をも

つ前方後円墳である忍岡古墳、交野市の森古墳群・妙見山古墳があり、中期では交野市の車塚古墳、大東市の堂山古墳群1号墳がある。後期になると生駒西山麓に多くの古墳が造営される。代表的なものは、更良岡山古墳群・清滝古墳群・大上遺跡、交野市の寺古墳群・倉治古墳群、寝屋川市の寝屋古墳、大東市の北条古墳群・宮谷古墳群・葛谷古墳群・堂山古墳群などがある。終末期では寝屋川市の国指定史跡石宝殿古墳がある。またこの時代は、市内をはじめ当時の河内湖縁辺部にあたるところに多くの集落が営まれるようになる。市内の遺跡としては、堅魚木をもつ家形埴輪や木製下駄などが出土した岡山南遺跡、馬形・犬形・水鳥形・鶏形などの動物埴輪や人物埴輪・衣蓋形埴輪など大量の埴輪や土器類が集落跡から出土した忍ヶ丘駅前遺跡・南山下遺跡、初期須恵器とともに大量の勾玉・白玉が出土した中野遺跡、手づくね土器・人形土製品・動物形土製品・滑石製品が出土した周溝内に小型馬が埋葬されていた方形周溝状の祭祀遺構や石敷製塙炉を検出した奈良井遺跡、水田跡や水口祭祀跡を検出した鎌田遺跡、木間池北方遺跡、四條暖小学校内遺跡などがある。

奈良時代では7世紀後半の土器が一括で出土した土坑や多くの土器と共に7体の土馬が出土した河川を検出した木間池北方遺跡、「大」と墨書きされた土師器坏が出土した南野遺跡や中野遺跡、素弁蓮華文軒丸瓦や土器類が出土した四條暖小学校内遺跡、寝屋川市の打上遺跡・長保寺遺跡、人面墨書き土器や「美濃」刻印の須恵器などが出土した大東市の北新町遺跡などがある。

寺院跡としては正法寺跡・讚良寺跡や寝屋川市の高宮廃寺・太秦廃寺がある。特に正法寺跡は薬師寺式の伽藍配置と推定されており、近年の調査では創建当時の素弁蓮華文軒丸瓦をはじめ多くの瓦が出土し、建物跡や基壇も検出している。また「正方寺」と墨書きされた土師器坏も多く土器と共に出土している。

平安時代では井戸内から「高田宅」・「福万宅」と墨書きされた黒色土器や緑釉陶器が出土した岡山南遺跡、黒色土器と甕を藏骨器に転用し納めていた土壙を検出した上清滝遺跡、「富寿神宝」を入れた藏骨器が出土した交野市の私市滝ヶ広遺跡、綠釉陶器や灰釉陶器を含む大量の土器が出土した寝屋川市の神田東後遺跡・高柳遺跡がある。

中世の遺跡は市内をはじめ周辺の各市において数多く存在している。上清滝遺跡では、旧河川から壽永三年（1184）年銘の題菱軸とともに木製聖観音立像・金箔塗り光背・下駄・箸などの木製品や瓦器椀・土師器皿・白磁などが出土している。坪井遺跡では、鎌倉時代の鍛冶工房跡を検出している。また忍ヶ丘駅前遺跡の調査においても井戸や掘立柱建物など多くの遺構を検出している。中世後期では三好長慶の居城であった飯盛山城があり、田原地区にはその支城であった田原城がある。また近年、寺口遺跡の調査で田原城主田原対馬守一族の墓地および寺跡を確認した。墓地では古瀬戸の水注を藏骨器に転用した墓や常滑の大甕を埋納し集団の納骨施設としていた遺構などを検出し、青磁持腰香炉や青白磁小甕などが出土した。寺跡では土壙跡などを検出し、土器や陶磁器・瓦類が多く出土した。また瓦の中には「千光寺」と刻印されているものも出土している。



- |              |              |            |           |
|--------------|--------------|------------|-----------|
| 1 譲良郡条里遺構    | 11 南山下遺跡     | 21 国中神社遺跡  | 31 墓谷古墳群  |
| 2 砂遺跡        | 12 石宝殿古墳     | 22 大上遺跡    | 32 飯盛山城跡  |
| 3 小路遺跡       | 13 錦田遺跡      | 23 木間池北方遺跡 | 33 城ヶ谷遺跡  |
| 4 三味頭遺跡      | 14 中野遺跡      | 24 城遺跡     | 34 宮谷古墳群  |
| 5 譲良川・更良岡山遺跡 | 15 墓の堂古墳     | 25 南野米崎遺跡  | 35 北条東古墳群 |
| 6 北口遺跡       | 16 奈良井遺跡     | 26 犀屋遺跡    | 36 北条西古墳群 |
| 7 奈良田遺跡      | 17 四條畷小学校内遺跡 | 27 伝播木正行墓  | 37 大将軍古墳  |
| 8 忍岡古墳       | 18 正法寺跡      | 28 北新町遺跡   | 38 狩崎城跡   |
| 9 坪井遺跡       | 19 清瀬古墳群     | 29 南野遺跡    |           |
| 10 忍ヶ丘駅前遺跡   | 20 岡山南遺跡     | 30 近世墓地    |           |

第1図 忍ヶ丘駅前遺跡周辺の遺跡

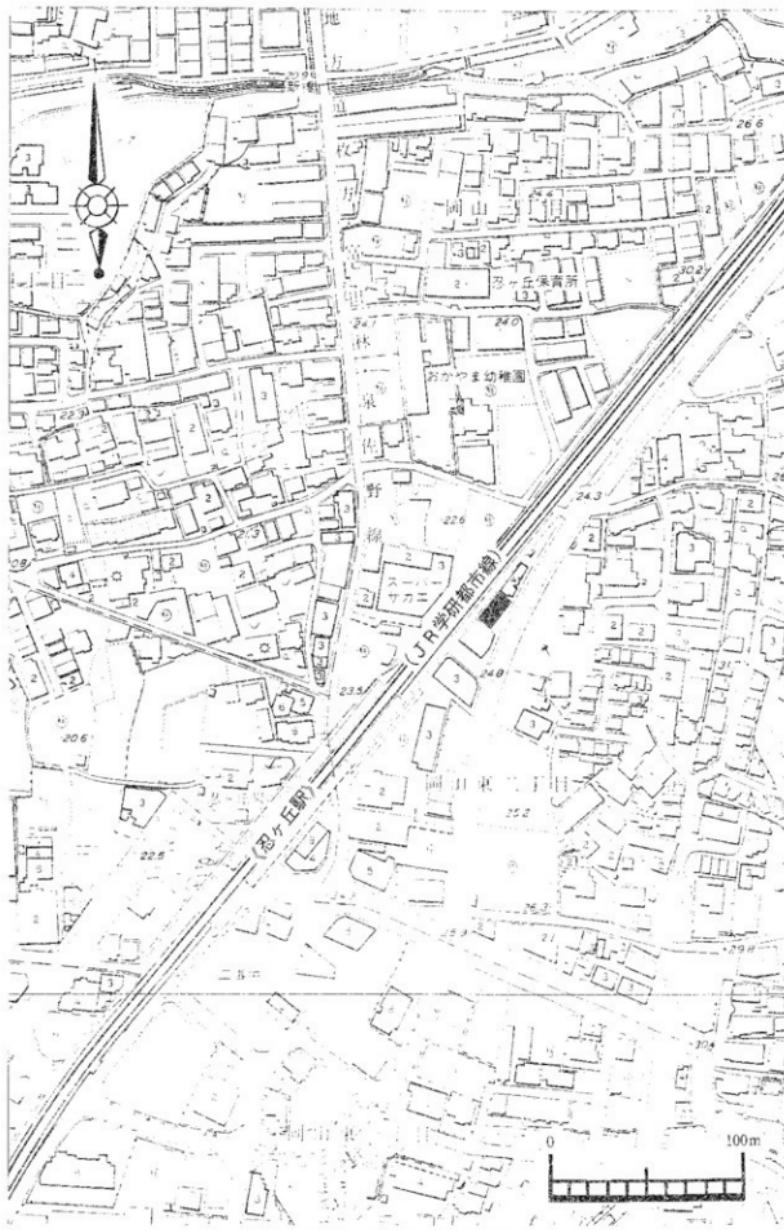
## 第2章 調査に至る経過

忍ヶ丘駅前遺跡は、昭和51年の国鉄片町線複線化工事に伴う発掘調査によって発見された遺跡で、国鉄片町線複線化工事及び忍ヶ丘駅前土地区画整理事業に伴う過去数次の調査結果から、古墳時代中期から中世の集落跡・古墳の複合遺跡であることを確認しており、四條畷市岡山東1丁目・2丁目・3丁目、岡山2丁目・3丁目・4丁目の東西約330m・南北約320mの範囲に所在する遺跡である。今回の調査地区は、四條畷市岡山東2丁目526-2・3に位置する。

平成7年7月3日に上記の用地において、八尾市新家町2丁目71番地柴田安夫氏から共同住宅建設予定の計画が四條畷市に提出された。その件に関して、同年7月10日に各関係部局との事前協議が行なわれ、四條畷市教育委員会文化振興室歴史民俗資料館では、該当地が埋蔵文化財の周知遺跡内にあたることから、文化財保護法第57条2第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が必要である旨を申請者代理人に説明した。同年8月4日に同届出が提出され、構造物の基礎工事等の内容を検討した結果、申請地周辺での過去の遺構検出状況から判断して当申請地においても遺構の検出が予測されたため、工事着手前に遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を説明した。同年9月21日に遺構・遺物の有無と基本層序を把握するため申請者代理人立ち会いのもと試掘調査を実施した。試掘調査は、建物の建設予定地内に幅1.2m・長さ2.1m・深さ1.9mの試掘穴を1箇所設定し行なった。その結果、現地表面下1.23mから1.73mの間に中世の遺物包含層を確認し、また耕作地の土留めに伴う石列を検出した。石列の一部には、五輪塔の火輪部を転用していることがわかり、遺物包含層からは瓦器碗片・土師器皿片が出土した。

試掘調査の結果については現地で申請者代理人に説明すると併に、今後の対応策について別途協議を行なった。その結果、建設工事によって遺構が破壊されると予測される部分については、その記録保存の為に発掘調査が必要である旨を説明した。

発掘調査は、平成7年10月30日から同年11月17日に終了した。遺物の整理作業は、平成8年4月30日に柴田安夫氏と四條畷市長森本稔が、埋蔵文化財発掘調査出土品の整理業務実施計画にもとづき発掘調査出土品整理委託契約書を締結し実施することとなり、平成9年3月31日までに終了した。



第2図 調査区位置図

## 第3章 調査の成果

今回の調査は、敷地面積217.40m<sup>2</sup>のうち工事によって遺構の破壊が予測される部分の全面発掘調査であり、面積は約165m<sup>2</sup>である。なお今回の発掘調査は、敷地のほとんどが調査対象地域であったため残土置場を確保することが不可能であった。そのため発掘調査は、調査地区をほぼ中央で北側と南側に分け反転作業で行なった。調査地区は国土平面直角座標値（第VI系）を用いて5m四方の区画設定を行ない、それぞれの区画は、その南西にあたる杭のX・Y値をもってその名称とした。またこれとは別に便宜的に北側地区・南側地区の名称も用いた。

### 第1節 基本層序

今回の調査地区は、以前宅地として利用されており、地表面はT.P.+25.500～25.600mとはば水平であったが、地山と考えている黄色粘土層（5Y 7/8）上面は、T.P.+23.900～24.200mと約20～30cm程の高低差をもって北西方向にゆるやかに傾斜している。

以下、確認した基本層序を上層から記載する。

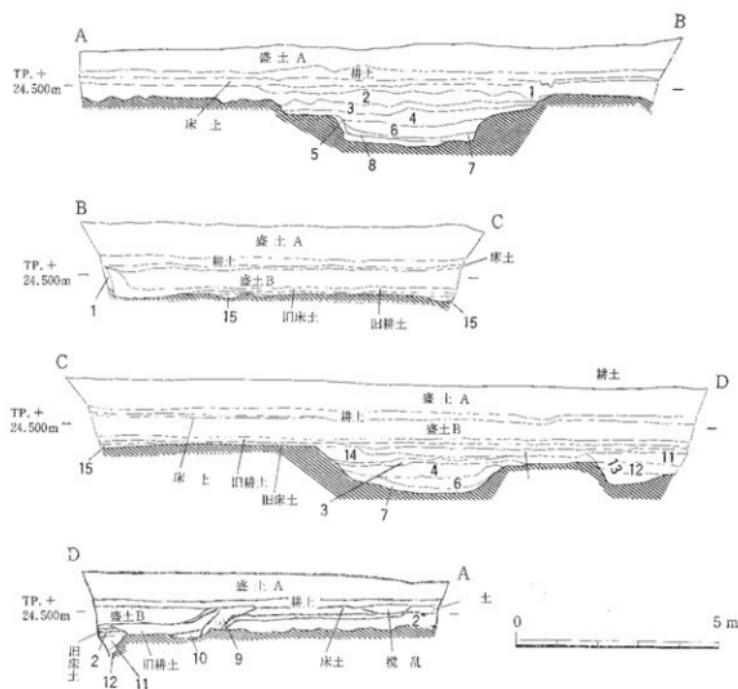
- 第I層 盛り土A、上面はT.P.+25.500～25.600mで、厚さは50～80cmである。現代の盛り土。  
第II層 耕土、上面はT.P.+24.800～25.000mで、厚さは10～30cmである。現代～近代の耕土。  
第III層 床土、厚さ4～10cm。現代～近代の床土。  
第IV層 盛り土B、上面はT.P.+24.600～24.700mで、厚さは40～50cmである。この盛土は、調査地区的西側半分で確認した。近代以降の盛り土。  
第V層 旧耕土、上面はT.P.+24.200～24.600mで、厚さは10～30cmである。この耕土は、調査地区的西側半分で確認した。近世の陶磁器片出土。  
第VI層 床土、厚さ10cm。この床土は、調査地区的西側半分で確認した。近世の床土。  
第VII層 灰褐色砂質土層。上面はT.P.+24.000～24.500mで、厚さは10～30cmある。この堆積土の上面で近世の遺構を確認した。（第3図-第2層）  
第VIII層 黄色粘土層（5Y 7/8）。上面はT.P.+23.900～24.200mで、中世の遺構検出面であり地山面である。

### 第2節 遺構

#### 第1遺構面（第4図、図版2・3）

##### ・耕作溝

この遺構面は、X=-139.300～X=-139.305・Y=-32.095地区、すなわち北側地区の西側下段面で検出した。南側地区においては保存状態が良好でなかったため検出できなかった。遺構面の標高は、T.P.+24.000m前後である。遺構は、耕作に伴う溝を5本検出した。それぞれの溝の幅は約20～30cmを測り、ほぼ南北方向に主軸をおき直線的である。長さは最長のもので約8m、最短のもので約2.5mであり、深さは約2～10cmであった。これらの遺構は灰褐色砂質土層（基本層序第VII層）の上面で検出したものである。遺物は、近世の陶磁器片が出土



- 第1層 緑灰色砂質土 (7.5GY 6/1)  
 第2層 灰褐色砂質土 (7.5YR 5/2)  
 第3層 灰黄色砂質土 (2.5Y 7/2)  
 第4層 黄灰色粘質土 (2.5Y 5/1)  
 第5層 明青灰色粘質土 (10BG 7/1)  
 第6層 灰色粘質土 (7.5Y 5/1)  
 第7層 青灰色細砂 (5B 5/1)  
 第8層 明青灰色細砂 (5B 7/1)  
 第9層 灰色砂質土 (10Y 6/1)  
 第10層 灰色砂質土 (N 5/) -粗砂混入  
 第11層 にぶい赤褐色砂質土 (5Y 4/3)  
 第12層 灰色粘質土 (7.5Y 4/1)  
 第13層 灰色粘質土 (7.5Y 6/1) と灰色粗砂 (10Y 7/1) の混合層  
 第14層 灰白色砂質土 (5Y 7/2)  
 第15層 緑灰色砂質土 (10G 6/1)

第3図 土層断面図

している。

これらの溝の東側で土留め用の石列を検出した。この石列は、約20~50cm大の石を上段面のすそ部に沿って、1段から3段の乱積みではば南北方向に並べている。石はほとんどが花崗岩の自然石であったが、五輪塔の台座（第8図-42・図版9-42）や火輪部・石臼（第8図-43・図版9-43）も転用していた。この石列の西側で、石列に沿つて幅約1m・深さ約30cmの溝を検出した。この溝内には木杭が數十本打たれており、側から長さ約1.7mの木が出土している。おそらくこの木や木杭は、石列の崩れを防止するためのものと思われる。南側地区では石列の一部と木杭を検出したが、保存状態は良好でなかった。

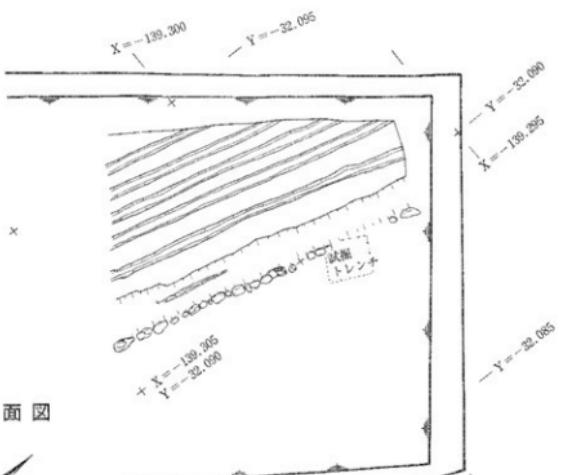
## 第2遺構面（第5図、図版4・5）

### ・溝

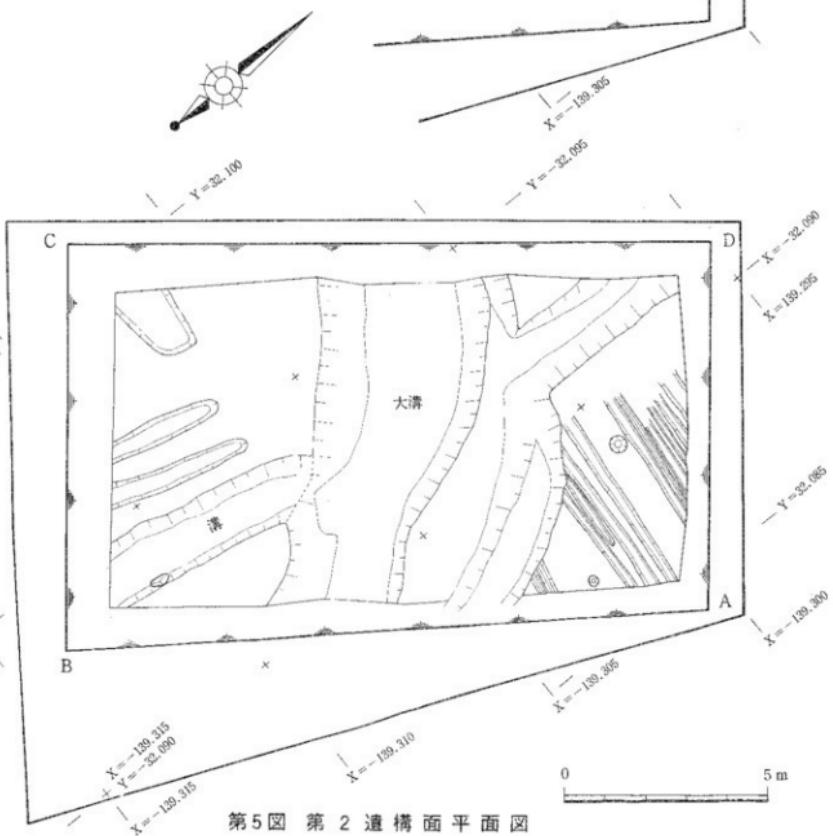
この遺構は、 $X = -139.310 \sim X = -139.315$ ・ $Y = -32.095$ 地区で検出した。肩部の標高は、T.P.+24.000~24.300mである。規模は長さ約5m・幅約1.5m・深さ約20cmで、ほぼ南北方向に主軸をおいている。底部の標高は南端がT.P.+23.850m・北端がT.P.+23.682mであり、北方向にゆるやかに傾斜している。また溝内には、十数ほんの木杭が打たれていた。この遺構は北側地区で検出した石列に伴う溝の一部であるが、南側地区では北側地区で確認した耕作溝検出面の灰褐色砂質土層（基本層序第Ⅶ層）ではなく、旧耕土・旧床土（基本層序第V・VI層）の下層が地表面（基本層序第Ⅳ層）であったため、第2遺構面の遺構と同じ面での検出となつた。遺物は、須恵器壺蓋（第8図-38・図版9-38）が出土している。この遺物は後世に混入した可能性が高いと考える。

### ・大溝

この遺構は、調査地区の中央部（ $X = -139.300 \sim X = -139.310$ ・ $Y = -32.090 \sim Y = -32.100$ 地区）で検出した。平面は北側の肩部が若干膨らみをもつ直線的な形態であり、ほぼ南東~北西方向に主軸をおく。断面形態は東端で逆凸形・西端で皿状を呈する。規模は長さ約7.8m・東端の幅約6.4m・西端の幅約4.7m・東端の深さ約1.1m・西端の深さ約0.9mであった。肩部の標高は、南東角でT.P.+24.338m・南西角でT.P.+24.016m・北東角でT.P.+24.087m・北西角でT.P.+23.513mである。北の肩部は約57cm程の高低差をもって西へ向かって低くなり、南の肩部は約32cm程の高低差をもって西へ向かって低くなっている。底部の標高は、東端でT.P.+23.055m・西端でT.P.+22.906mを測り、途中若干起状しながら約15cm程の高低差をもって西へ向かって低くなっている。また、溝の北側には西から約2mのところ（ $X = -139.300$ ・ $Y = -32.095$ 地区）に他の溝との合流点がある。この遺構の平面形態は直線的であり、南北方向に主軸をおく。断面形態は皿状を呈する。規模は長さ約4m・幅約1.6m・北端の深さ約60cm・南端（合流点）の深さ約40~65cmであった。肩部の標高は、南東角でT.P.+23.799m・南西角でT.P.+23.470m・北東角でT.P.+23.924m・北西角でT.P.+23.562mである。東の肩部が西の肩部より約35cm程高くなつておらず、約10cm程の高低差をもって南へ向かって低



第4図 第1 遺構面平面図



第5図 第2 遺構面平面図

くなっている。底部の標高は、北端でT.P. +23.124m・南端でT.P. +23.094mを測り、緩やかに南へ向かって低くなっている。以上のことから、この大溝はほぼ地形に沿って南東から北西へ向かって流れしており、東端から約5.5mの地点で北側から1本の溝が合流していることがわかった。遺物は、土師器皿（第6図-1～16・図版6-1～16）・瓦質三足釜（第6図-17～22・図版8-17～22）・瓦器椀（第7図-23～37・図版7-23～34・図版8-35～37）・須恵器台付長顎壺（第8図-39・図版9-39）・砥石（第8図-41・図版9-41）などが出土している。

以上の他に溝3本・柱穴2基・耕作溝12本を検出しているが、遺物が出土しなかつたため時期などは不明である。ただし埋土の観察や検出状況からは、柱穴と耕作溝は大溝が埋まつたものの遺構であり、溝は大溝と同じ時期のものであると考える。

### 第3節 遺 物

今回の遺物のはほとんどは大溝から出土した土器等である。時期的には、鎌倉時代後半のものが中心で、飛鳥時代中期・奈良時代のものもある。以下、遺構ごとに記述する。

#### ・溝出土遺物（第8図-38・図版9-38）

##### 須恵器坏蓋

口径8.6cm・天井部までの器高1.8cmで、天井部中央には高さ1.2cmの宝珠つまみを伴う。かえりの先端は、口縁端部より下に0.2cm突出している。この遺物は飛鳥時代中期のものと考えているが、第2節で述べたように後世に混入した可能性が高い。

#### ・大溝出土遺物（第6～8図・図版6～9）

1～10は土師器の小皿である。平底からゆるやかに立ち上がり口縁部が短く直立するもの（1）、平底から口縁部が外上方へ伸びるもの（2・3・5・8・10）、平底から口縁部までゆるやかに内湾しながら続くもの（4・6）、丸底ぎみの底部からやや外反しながら口縁部に至り口縁端部が若干立ち上がるもの（7）、丸底ぎみの底部から口縁部が外上方へ伸びるもの（9）がある。口径は10cm未満で、器高は2cm未満のものである。

11～16は土師器の中皿である。丸底ぎみの底部から口縁部が外上方へ伸びるもの（11）、上げ底ぎみの底部からやや外反しながら口縁部に至り口縁端部が若干立ち上がるもの（12）、平底から口縁部までゆるやかに内湾しながら続くもの（13・14・16）、平底からやや外反しながら口縁部に至り口縁端部が厚いもの（15）がある。口径は15cm以下で、器高は3cm以下のものである。

17～22は瓦質の三足釜である。4点とも体部は球形を呈し口縁部は内湾する。口縁端部を丸く納め、鍔は断面三角形を呈し外上方へ短く伸び端部を丸く納めるもの（17・18）、口縁端部に浅い沈線を巡らす面をもち、鍔は端面に浅い沈線を巡らす面をもち外上方へ短く伸びるもの（19・20）がある。体部の鍔下には棒状の脚を貼りつけた跡がみられる（19）。17と18は体部内面に横方向のハケメ調整の痕跡がみられ、体部外面の鍔下には多量の煤が付着している。19と20は体部内面に横方向のハケメ調整の痕跡がみられ、体部内面の鍔の裏側にあたる部分には明瞭な横ナデ調整による指圧痕がある。体部外面の鍔下には煤が付着している。21と22は脚部である。

23～37は瓦器椀である。体部は底部からまっすぐ外上方へ伸び口縁部へ至る。口縁部は横ナ

テ調整によってわずかに外反し、体部外面には口縁部付近にのみヘラミガキ調整を施し、体部内面には粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面には沈線を施し、高台は低い断面三角形を呈するもの（23・24・25・27・28・29・30・37）、体部は底部から内湾しながら口縁部へ至る。口縁部は横ナデ調整を施すが直立ぎみであり、体部外面には口縁部付近にのみわずかにヘラミガキ調整を施し、体部内面には粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面には沈線を施し、高台は低い断面三角形を呈するもの（26）、体部は底部からやや内湾しながら外上方へ伸び口縁部へ至る。口縁部は横ナデ調整によってわずかに外反し、体部外面には口縁部付近にのみ若干のヘラミガキ調整を施し、体部内面には粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面には沈線を施し、高台は低い断面三角形を呈するもの（31・36）、体部は底部から内湾しながら口縁部へ至る。口縁部は横ナデ調整を施すが直立ぎみであり、体部外面にはヘラミガキ調整を施さず、体部内面には粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面には沈線がなく、高台は痕跡がみられるだけのもの（32）、体部は底部から内湾しながら直立ぎみの口縁部へ至る。体部外面にはヘラミガキ調整を施さず、体部内面には粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面には沈線を施し、高台は低い断面三角形を呈するもの（33）、体部は底部からまっすぐ外上方へ伸び口縁部へ至る。口縁部は横ナデ調整によって外反し、体部外面には口縁部付近にのみわずかにヘラミガキ調整を施し、体部内面には粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面には沈線を施し、高台は低い断面三角形を呈するもの（34）、体部は底部から内湾しながら口縁部へ至る。口縁部は横ナデ調整によってわずかに外反し、体部外面にはヘラミガキ調整を施さず、体部内面には粗いヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面には沈線を施し、高台は低い断面三角形を呈するもの（35）がある。見込みの暗文は、外側に輪部が出る連結輪状暗文（23・24・25）、連結輪状暗文（26・27・28）、同心円状暗文（29・30・31）があり、独立した暗文をもたないもの（32・35・37）、不明のもの（33・36）もある。炭素の吸着については25・35は全くみられず、23・30・31・34は部分的にみられないところがある。

以上、土師器皿・瓦質三足釜・瓦器碗については鎌倉時代後半（13世紀後半～14世紀初頭）のものととらえておきたい。

39は台付長頸壺である。台の一部は欠損しているが、体部の中央よりやや上半部に最大径の肩部をもち口縁部に向かってゆるやかに外反する。頸部と肩部にそれぞれに2条の沈線を巡らす。体部上半部は回転ナデ調整・下半部は回転ヘラケズリ調整を施している。この遺物は、奈良時代のものととらえておきたい。

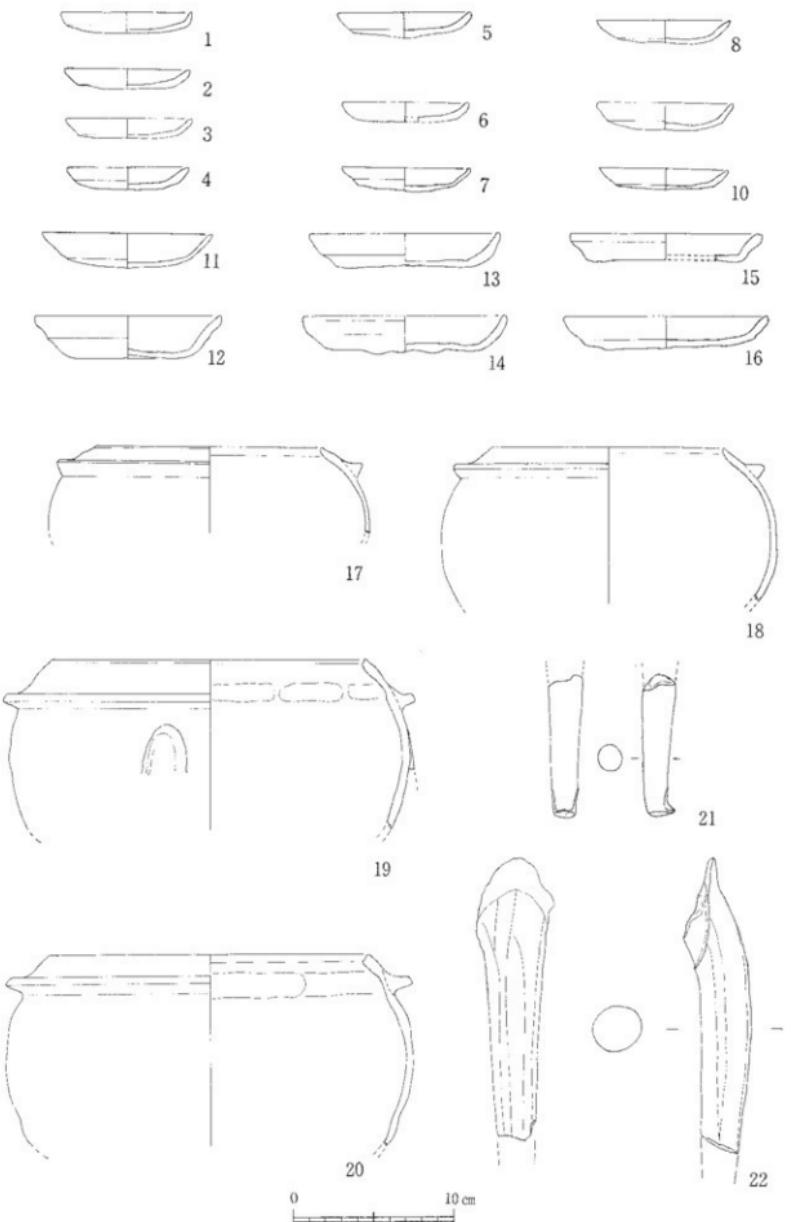
41は砥石である。長方形を呈し、四面とも使用した痕跡が認められる。

・包含層出土遺物（第8図・図版9）

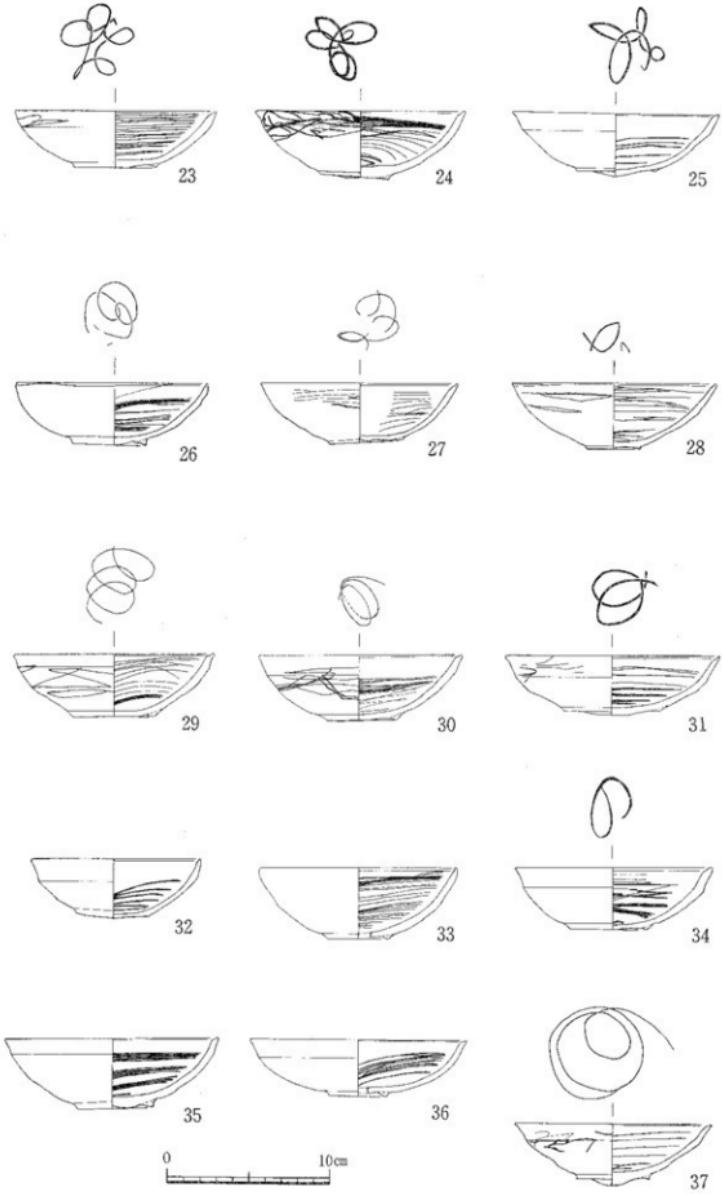
40は白磁の碗である。口縁端部は玉線状を呈する。

42は五輪塔の台座である。平面形態は正方形で、一辺に3単位の複弁を配すると思われる。

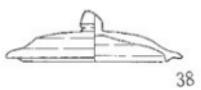
43は石臼の上臼である。上面は皿状にえぐり、中央よりやや外側に円形の入れ口を穿っている。裏面には7本の溝を1単位として6単位の切り込みを入れているものと思われる。



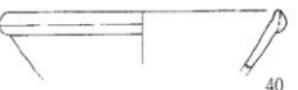
第6図 大溝出土遺物 1



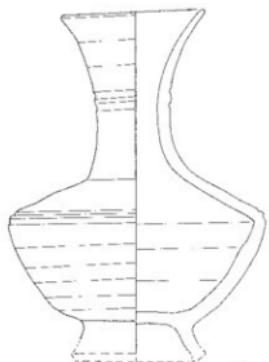
第7図 大溝出土遺物 2



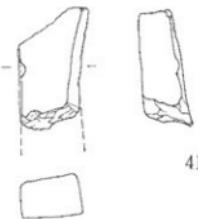
38



40

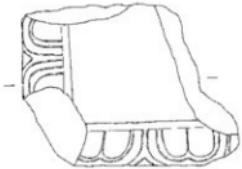


39

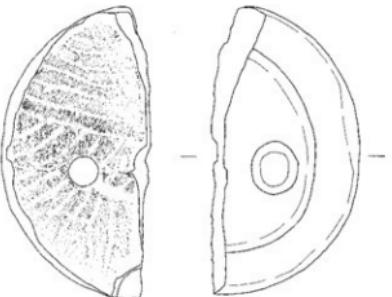


41

0 10 cm



42



43

0 10 cm

第8図 大溝・溝・包含層出土遺物

## 第4章 まとめ

忍ヶ丘駅前遺跡は、昭和51年の国鉄片町線複線化工事に伴う発掘調査によって発見されて以来、国鉄片町線複線化工事や忍ヶ丘駅前土地区画整理事業に伴い数次の発掘調査を行なってきた。その結果、古墳時代中期から中世に至る集落跡・古墳の複合遺跡であることを確認している。今回の調査では近世の耕作溝と石列に伴う溝、鎌倉時代後半の大溝と溝、それより時期が新しいと考えられる耕作溝と柱穴を検出し、中世以前の遺構は検出されなかった。

以下、要点について述べまとめておきたい。

まず、今回の発掘調査で確認した層序・遺構・遺物から考えられる土地利用の変遷は以下のとおりである。最初は、鎌倉時代後半に大溝と溝が存在している。大溝の遺構としての性格は今回の調査地区の範囲内では不明である。今後の周辺調査の結果を待ちたい。その大溝が埋まつた段階で柱穴と耕作溝が掘られたことが埋土の観察や検出状況から確認できた。しかし、遺物が出土しなかつたことからそれらの詳細な時期などについては不明である。ただし大溝より上層の面で鎌倉時代以降近世までの遺構が確認できなかつたため、ひとつは上記の時期不明の遺構がこの時期のものであると考えられ、もうひとつはそれらは大溝とほとんど時期差なく、この地は近世まで荒地であったとも考えられる。近世の段階においては2枚の耕作地（おそらく水田と思われる）に分れていたことがわかつた（基本層序第Ⅶ層上面・第4図）。その2枚の耕作地は、調査地区内には南北方向に並べられた土留め用の石列を境として東西に上段と下段に分れており。発掘調査の段階では東の上段面が約40cmほど高くなっていた。またその石列には、花崗岩の自然石のほかに五輪塔の火輪部や台座・石臼を転用していた。その後、あらたに耕土と床土を搬入している（基本層序第V・VI）。これらの層は下段面でのみ確認したが、旧耕土が上段面にむかって上がっていることから（第3図）本来は上段面にも存在していたものと考えられ、上段面の旧耕土はさらなる耕土の搬入の際に削平されたと考えられる。この耕作地は、近代以降に1枚の耕作地にするため西側の下断面を埋めている（盛り土B）。その後、宅地として利用するために再度盛り土をし（盛り土A）現在に至っている。

鎌倉時代後半の明確な建物跡は検出しなかつたが、椀・皿や釜といった食膳具や煮炊具が出士していることから集落の一部にあたると考えられる。また飛鳥時代中期や奈良時代の遺物も出土していることからこれらの時期の遺構も周辺に存在している可能性が考えられる。

最後に、今回の調査地区の西側約90mのところには平安時代以降、幹線道路として利用してきた東高野街道が南北に通じている。過去の調査において中世の集落の間をこの道が通じていたことが確認されている。現在はその街道も開発により寸断され昔の面影もほとんど残っていないが、鎌倉時代には街道筋の集落として栄えていたのであろう。

## 遺物観察表

遺構名	種類	押出番号 国版番号	器形	法量(cm) (推定) 口径 器高 (残高) 底径	色調	胎土 素質 砂粒	調整・手法		残存度	備考
							外面	内面		
溝	須恵器	8-38 9-38	杯 蓋	(8.8) 3.0	灰 色 (N 6/)	緻 密	刮軸ヘラケナリ ナデ	ナデ	1/4	
大溝	土師器	6-1 6-1	皿	[8.0] 1.3	淡 黄 色 (2.5Y 8/3)	緻 密 1mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
		6-2 6-2	皿	[7.6] 1.2	浅 黄 色 (2.5Y 7/3)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/2	
		6-3 6-3	皿	7.8 1.2 [10YR 7/3]	にふい黄橙 色	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ完形	
		6-4 6-4	皿	[7.4] 1.4 [6.4] [10YR 8/3]	浅 黄 橙 色 (10YR 8/3)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	3/4	
		6-5 6-5	皿	8.2 1.6	浅 黄 橙 色 (10YR 8/4)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ完形	
		6-6 6-6	皿	[7.8] 1.2	淡 黄 色 (2.5Y 8/3)	緻 密 3mm以下の砂粒 金雲母含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
		6-7 6-7	皿	7.8 1.5 [6.0] [10YR 8/3]	浅 黄 橙 色 (10YR 8/3)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ完形	
		6-8 6-8	皿	8.2 1.4	にふい橙色 (7.5YR 7/4)	緻 密 2mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	3/4	
		6-9 6-9	皿	[8.4] 1.7 [7.0] [10YR 8/3]	浅 黄 橙 色 (10YR 8/3)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/2	
		6-10 6-10	皿	7.9 1.3 5.8	淡 黄 色 (2.5Y 8/3)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ完形	
		6-11 6-11	皿	[10.4] 2.1 [10YR 8/3]	浅 黄 橙 色 (10YR 8/3)	緻 密 3mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/2	
瓦質土器	瓦質土器	6-12 6-12	皿	[11.4] 2.6 [7.8] [7.5YR 8/3]	浅 黄 橙 色 (7.5YR 8/3)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/3	
		6-13 6-13	皿	11.6 2.1 8.2 [2.5Y 8/2]	灰 白 色 (2.5Y 8/2)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ完形	
		6-14 6-14	皿	[12.4] 2.1 [10.0] [10YR 8/2]	灰 白 色 (2.5Y 8/2)	緻 密 1mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/2	
		6-15 6-15	皿	[11.8] 1.7 [9.2] [10YR 8/3]	浅 黄 橙 色 (10YR 8/3)	緻 密 2mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	1/4	
		6-16 6-16	皿	12.6 2.0 10.3 [7.5YR 8/2]	灰 白 色 (7.5YR 8/2)	緻 密 2mm以下の砂粒 金雲母を含む	口:ヨコナデ 底:ナデ	口:ヨコナデ 底:ナデ	ほぼ完形	
		6-17 8-17	三足釜	[13.8] 5.1 [5.1]	暗 灰 色 (N 3/)	緻 密 1mm以下の砂粒 若干含む	口:ヨコナデ 体:不明	口:ヨコナデ 体:ナデ	口縁1/2	体部外面 煤付着
		6-18 8-18	三足釜	[12.0] 9.3 [9.3]	暗 灰 色 (N 3/)	緻 密 1mm以下の砂粒 若干含む	口:ヨコナデ 体:不明	口:ヨコナデ 体:ナデ	口縁1/6	体部外面 に多量の煤 付着
		6-19 8-19	三足釜	[19.0] 10.3 [10.3]	暗 灰 色 (N 3/)	緻 密 1mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	口縁1/3	体部外面 に煤付着
		6-20 8-20	三足釜	[19.4] 11.6 [11.6]	暗 灰 色 (N 3/)	緻 密 1mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	口縁1/3	体部外面に 煤付着
		6-21 8-21	三足釜 脚 部	(8.7)	灰 色 (N 6/)	緻 密 1mm以下の砂粒 を若干含む	ナデ			

造構名	種類	揮画番号 國版番号	器形	法量(cm)口徑 (推定) 器高 (残高) 底径	色調	胎土 素質 砂粒	調整・手法		残存度	備考	
							外 面	内 面			
大溝	瓦土質器	6-22	三足釜	(17.2)	灰白色	やや粗 3mm以下の砂粒 を多く含む	ナデ				
		8-22	脚部		(2.5Y 7/1)						
瓦器	瓦	7-23	椀	〔12.4〕 3.4 〔4.0〕	灰色	やや密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	1/2	連結輪状 暗文	
		7-23	椀		(N 4/)						
	器	7-24	椀	〔12.8〕 4.1 4.1	暗灰色	密 3mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	完形	連結輪状 暗文	
		7-24	椀		(N 3/)						
	瓦	7-25	椀	〔12.6〕 3.9 4.8	灰白色	密 3mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	1/3	連結輪状 暗文	
		7-25	椀		(10YR 8/1)						
	器	7-26	椀	11.2 3.8 4.5	灰色	密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	ほぼ完形	連結輪状 暗文	
		7-26	椀		(N 4/)						
	瓦	7-27	椀	12.1 3.7 4.6	暗灰色	密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	3/4	連結輪状 暗文	
		7-27	椀		(N 3/)						
須恵器	瓦	7-28	椀	〔12.4〕 4.0 3.2	暗灰色	密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	2/3	連結輪状 暗文	
		7-28	椀		(N 3/)						
	器	7-29	椀	12.2 3.8 5.0	灰色	密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	1/4	同心円状 暗文	
		7-29	椀		(N 4/)						
	瓦	7-30	椀	〔12.4〕 4.0 4.2	灰色	密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	1/2	同心円状 暗文	
		7-30	椀		(N 4/)						
	器	7-31	椀	〔13.0〕 3.6 〔5.8〕	灰色	密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 体:ヘラミガキ 指揮え	口:ヨコナデ 体:ナデ	1/3	同心円状 暗文	
		7-31	椀		(N 5/)						
	瓦	7-32	椀	10.4 3.6 4.4	暗灰色	密 2mm以下の砂粒 をやや多く含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	完形		
		7-32	椀		(N 3/)						
石製品	瓦	7-33	椀	〔12.0〕 4.3 〔3.6〕	暗灰色	密 1mm以下の砂粒 を若干含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	1/2		
		7-33	椀		(N 3/)						
	器	7-34	椀	12.0 3.8 4.6	灰色	密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	完形		
		7-34	椀		(N 4/)						
	瓦	7-35	椀	13.0 4.3 4.5	灰白色	密 1mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	4/5		
		7-35	椀		(N 7/)						
	器	7-36	椀	〔13.2〕 3.4 〔3.4〕	灰色	密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	1/4		
		7-36	椀		(N 5/)						
	須恵器	7-37	椀	〔11.8〕 3.8 4.4	灰色	密 2mm以下の砂粒 を含む	口:ヨコナデ 体:ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ、ヘラミガキ	1/4		
		7-37	椀		(N 4/)						
包	白磁	8-39	台付 長頸壺	〔8.6〕 〔20.3〕	灰色	密 1mm以下の砂粒 を含む	回転ヘラケズリ 回転ナデ		小片	玉縁状 口縁	
		9-39			(N 6/)						
石製品	石	8-41	砥石	長(7.2) 巾(3.8) 厚(2.4)						石列に転用 複弁	
		9-41									
	品	8-40	碗	〔16.8〕 〔3.5〕	灰オリーブ色	密 砂粒				石列に転用 上白	
		9-40			(5Y 6/2)						
含層	石製品	8-42	五輪塔	長(19.9) 高 11.7						1/2	
		9-42	台座								
		8-43	石臼	直径35.7 厚 12.6							
		9-43									

# 報告書抄録

ふりがな	しのぶがおかえきまえいせきはつくつちょうさかいようほうこくしょ
書名	忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要報告書
副書名	忍ヶ丘マンション建設に伴う発掘調査概要報告書
シリーズ名	四條畷市埋蔵文化財調査報告
編著者	村上 始
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 0720-77-2121
発行年月日	1997年(平成9年)3月31日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の 原因
しのぶがおかえきまえいせき 忍ヶ丘駅前遺跡	しじょうなわてしまやま 四條畷市 岡山東2丁目	272299	34° 4'4"	135° 38'57"	平成7・10 ・30~11・17	165m <sup>2</sup>	忍ヶ丘 マンション建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
忍ヶ丘駅前 遺跡	集落跡	近世 鎌倉時代	耕作溝 大溝 溝	瓦器、土師器皿、瓦質釜、白磁、須恵器 壺・杯蓋、石臼、五輪塔	

# 図版



1. 遺跡周辺空中写真（南から）



2. 調査前全景（南から）



1. 調査スナップ



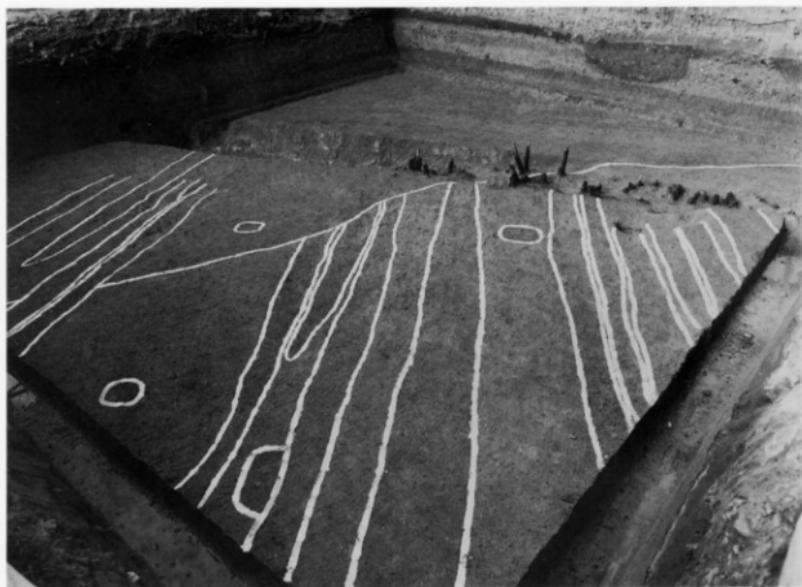
2. 第1遺構面検出全景（北側地区、南西から）



1. 第1遺構面全景（北側地区、西から）



2. 五輪塔台座出土状況



1. 第2遺構面検出全景（北側地区、東から）



2. 第2遺構面全景（北側地区、北から）

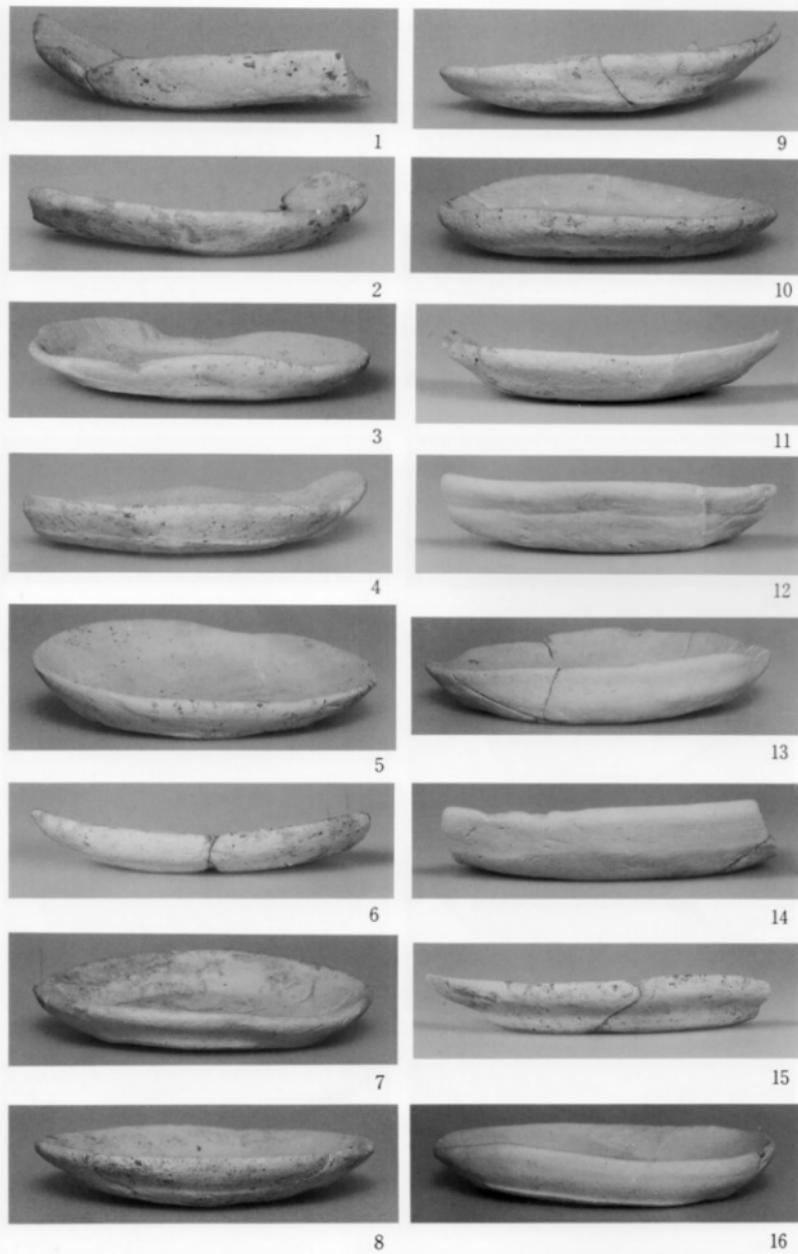


1. 第2遺構面検出全景（南側地区、東から）



2. 第2遺構面全景（南側地区、北から）

図版6 大溝出土遺物1



図版7 大溝出土遺物2



23



29



24



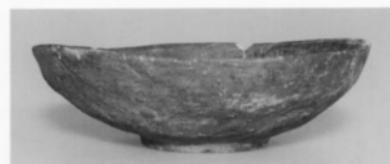
30



25



31



26



32



27



33

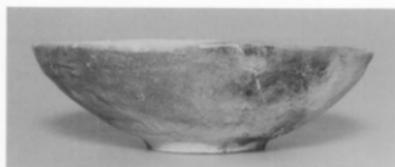


28

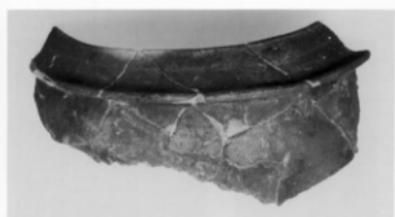


34

図版 8 大溝出土遺物 3



35



19



36



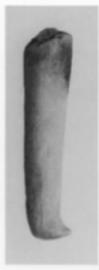
20



17



18

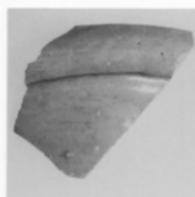


21

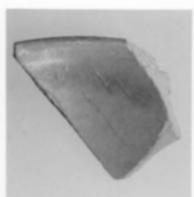


22

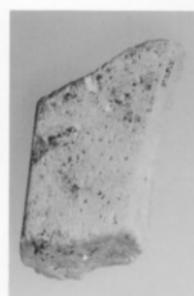
圖版 9 大溝・溝・包含層出土遺物



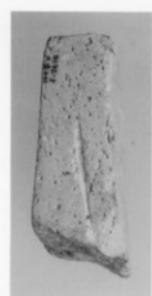
40



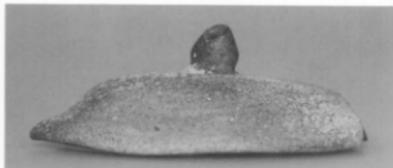
40'



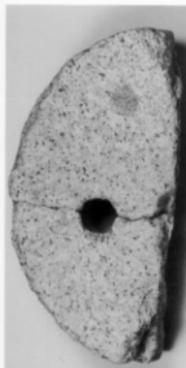
41



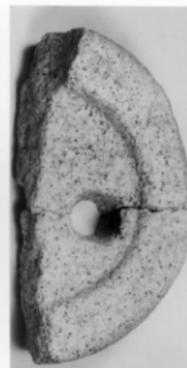
41'



38



43



43'



39



42

忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要

平成9年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会  
四條畷市中野本町1-1

印刷 加地企画印刷株式会社